

少女雑誌の部屋から

特集 『少女倶楽部』に見る戦争の影

「わすれなぐさ」6月号でご紹介した『少女の友』と並んで人気だったのが『少女倶楽部』です。明るくたのしいイメージがありますが、戦時中には他の雑誌と同様に、軍事色が強くなり、戦意をあおるような文言であふれていました。テレビもインターネットもない時代、いちばんの娯楽であったらう雑誌の中に次第におとされていく戦争の影。少女たちはどのような想いでページをめくっていたのでしょうか。

大日本雄弁會講談社
少女倶楽部

創刊 1923年 1月号
終刊 1962年 12月号

講談社の基本理念「おもしろくて、ためになる」のとおり、教科書の副読本的な編集方針を貫いて出版界をリード。小学校高学年から女学校低学年の少女たちを対象としており、安心して子どもに読ませられる雑誌として保護者からも圧倒的な支持を得る。それまでの少女雑誌の読者層は主に大都市の裕福な家庭の子女に限られていたが、発行部数を多くして地方の町村でも販売し、全国の少女たちに読む機会を与えた。

少女小説が売りもので、吉屋信子、佐藤紅緑などの長編小説を連載。豪華なふろくも大きな魅力だった。昭和21(1946)年4月号より『少女クラブ』と改題。昭和38(1963)年からは『週刊少女フレンド』へと発展した。

戦時中の少女雑誌

昭和16(1941)年の太平洋戦争開戦後は、言論統制、パルプ資源の節約を目的として、出版社や雑誌の統廃合がすすめられていきました。

昭和19(1944)年になると、少女雑誌は『少女倶楽部』と『少女の友』の2誌だけになりました。それらも戦況の悪化に伴い、ページ数は減らされ、紙質も悪くなっていきました。

働く少女たち

昭和16(1941)年、労働力の量的確保のために、女子や小学校卒業生を無報酬で工場等に配置する国民勤労報国協力令が実施されました。『少女倶楽部』の表紙絵にも、作業に従事する少女が描かれており、勤労働員を想起させます。また、洗濯や掃除などの家事労働を行う姿や、運動をする姿も多く見られ、国家が理想とする少女像がそこにありました。

強くなる軍事色

戦況が厳しさを増す中、雑誌の内容は次第に軍事色の濃いものになっていきました。添えられるキャッチコピーは戦意高揚を目的とするものばかり。食料品や日用品の欠乏を補う代用品についての紹介記事なども多く見られました。しかし、徹底した軍国教育と言論統制のためか、少女たちが戦争に苦しみ悩むというような姿は見つけることができません。銃後を守った少女たちの真の姿が明らかになったのは戦後になってからです。

異例の社告

昭和21(1946)年、『少女クラブ』8月号に発行元の大日本雄弁會講談社から戦争中の活動の誤りを認めて謝罪するという社告が出されました。

「本社では戦争中雑誌その他の出版物を通して國策に協力してまゐりました。この間本社の出版活動について考へますと、今日、読者の皆様に対し、ふかい責任を感じてをります。・・・(以下略)」
他の雑誌ではこのような社告は出されておらず、極めて異例なものでした。

見え隠れするプロパガンダ

雑誌の表紙にはスローガンが添えられ、文房具や化粧品などの広告までもが政府のプロパガンダで埋め尽くされ、少女たちにも大きな影響を与えました。

スローガン

昭和17年 「この一戦、何がなんでも やり抜くぞ」

昭和18年 「清く明るくすなほで強く！」

昭和19年 「決戦の年 米英を撃滅しよう」 「撃ちてし止まむ」